



地域連携室です。

『連携のかけ算』実践中！

回復期病棟配属となり、2年目を迎えました。患者様のことで様々な職種と話す機会が増えていく中で、多職種連携を実感したあるエピソードをご紹介します。

とても暑かった今年の夏、ある患者さん（Mさん）が当院へ転院してきました。Mさんの診断名は左視床出血。右片麻痺と失語のある方でした。栄養状態は特に大きな問題が見られませんでした。入院時より食事摂取量にムラが見られている状況でした。ご家族から「元々食べる量が少ない」との話もあり、当院へ入院してくる前の救急病院でも日によりムラがみられ5割～8割程度の摂取との情報でした。また、右利きだったため左手でスプーンを使わざるを得ない状況でした。しっかりとリハビリを行い、健康状態を維持するためにどうか少しでも食べてほしいと考えていました。

入院されてから少しした後、担当の作業療法士から「左指にも変形があり、病院食を入れている食器ではスプーンですくいくいたため食器変更できないか」との相談がありました。実際に食器を並べ、ひとつひとつ食べやすいものを選びながら話し合いを重ねました。

そして、話し合いをもとに変更したところ、驚くことに変更した途端から全量摂取して頂けるようになりました。事前情報で聞いていたこととは比べものにならないほどです。

しっかり栄養摂取できているからか、入院時よりも顔つきが良くなったように見え、リハビリに対する意欲も向上したように思いました。

たった一つの変更が、大きな変化をもたらしたと感じます。この現場を見た時にとっても嬉しく、思わず心の中でガッツポーズをしてみました。



作業療法士との話がなければ、以前より食の細い人だから…と固定観念で決めつけていたのかもしれないし、変化も見られないままだったかもしれません。今回管理栄養士だけの視点では見えなかった部分を作業療法士より教えてもらいました。2個ある目を4個にしたら効果が倍になったように、専門的知識×専門的知識の相乗効果は人数が増えれば増えるほど大きくなるし、多くの視点から患者様を見ることの必要性を再認識した事例でした。

一つの視点から物事を見るのではなく、「もしかしたら～かもしれない」「～ということも考えられるかもしれない」という色々な「かもしれない」の気持ちを持ち、今後も早期退院を目指し支援を続けていきたいと思えます。



管理栄養士
塩田 由美子

【回復期リハビリテーション病棟から】

【入退院状況 ～H30.9月末現在～】

①退院許可から当院転院までの平均日数 ⇒

5.2	日
-----	---

(過去3か月間)

②在宅復帰率(過去半年間) ⇒

80	%
----	---

③疾患別割合(9月)

脳血管

63	%
----	---

運動器

18	%
----	---

廃用症候群

12	%
----	---

診療情報提供書を確認させて頂きましたら、医師等と受け入れについて速やかに検討させて頂き、
当日か、翌日にはお返事をさせていただきます。

10月7日、今年のお祭りもお神輿が来てくれました。
患者さんが季節を感じられる大切なひとときです。



『地域社会への貢献』を実践しています。

福角病院 リハビリテーション科科长 門屋佳代 PT が、9月に久枝公民館にて地域住民の方々を対象にお話ししました。タイトルは「自分再発見！キーワードは自己自覚！」。運動習慣があることの大切さなどについて熱く語りました。また参加者全員で体力測定も行いました(①筋力 ②柔軟性 ③バランス能力 ④俊敏性)。みなさん、自分の体力の自覚へと繋がった様子でした。

当院では、病院のスタッフが地域へ出かけて行き、このような健康に関する教室の実践に積極的に取り組んでいます。私たちの基本理念のひとつである『地域社会への貢献』の一例でした。



相談員：辻中聡美・正木新太郎・松本詩織(回復期リハビリ病棟)
和田千佳(医療療養病棟)

看護師：三井稲子・上岡かよ子

ケアマネ：平田美穂子(居宅介護支援事業所『福角の里』兼務)

理学療法士：川口有里子(訪問看護ステーション『福角』兼務)

代表：黒河文博

☎地域連携室 089 (978) 7756 ※Fax 兼用